

所 信

スローガン

『天下為公』

～ソーシャル・キャピタルの醸成による市民主体のまちづくり～

社団法人水戸青年会議所

第60代 理事長

宮田 武範

【はじめに】

戦後の復興期に、国家としても混沌とした状態であり、我がふるさと水戸もまだまだ先が見えずに明日への夢や希望も明確に持てなかった頃、産声を上げた組織があった。「このままでは、だめだ!」、「我々若手が何とかしなければ!」と水戸の未来を自らの手で創るために志高き同志が相集い創立されたのが、水戸青年会議所である。そして時は経ち、平成23年3月11日14時46分、我々がかつて経験した事のない東日本大震災の発災。軽々に想定外という言葉は使いたくないが地震とともに、誰もが予想だにしなかった大津波は、沿岸部のみならず内陸部まで次々と襲い多くの人命を飲み込んでいった。さらに、福島第一原子力発電所の事故により、未だ愛する故郷に帰れずに避難所生活を強いられている人達がいる。我々はこの戦後最大の国難ともいべき現実から決して目を背けてはならない。今一人ひとりで出来る事は小さなことであっても、互いに手を携え歩調を合わせるにより国難を乗り越える事の出来る、大きな波動となることを信じて進むしかない。それは古来より美德あふれる高潔な精神性を有する日本人だからこそ出来る事だと私は確信をしている。そして我がふるさと水戸に目を向けてみても、被災後まだまだ完全復興には至っていない。まずは水戸青年会議所現役メンバー及びこれまで各時代を築き上げて頂いた先輩方の英知と衆知を集め「水戸のオールJC」として現状を打破していきたいと思う。

「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」

現在の混迷を宿命と受け止め、ピンチの反作用を期してチャンスと捉え、水戸だからこそ出来る事を的確に、そして着実にやっていこうではないか。その上で一番大切なのは、人と人の和なのである。だからこそまずは自己を確立しようではないか。自己の確立は自分自身の為でもあるが、それは結果として人と人の和の為にも繋がるのである。さて青年会議所は何の為に存在しているのだろうか。私は上述した通りに第一義として自分創りをする団体だと思っている。そして常に情熱

を持ちメンバー同志互いに研鑽し合い、利他のこころを持って愛する水戸のまちづくりを行う団体なのだ。私たちの情熱を意義あるものとし、具体的に地域を変えていくなれば、自己満足に陥る事無く地域の皆様の笑顔に繋がっているのかを常に考えて行動していく必要があるだろう。「やるべきことを、適時適切に、全力でやる」という意識を皆で持ち、地域の役に立つ組織であり続けたい。

【創立60周年を迎えて】

1953年11月、日本経済の正しき発展と世界平和の実現に向け、社団法人水戸青年会議所は誕生し、創立60周年を迎える事となりました。戦後復興の志を掲げ立ちあがった諸先輩方の熱い想いは、今尚変わることのない『明るい豊かな社会の実現』であり、時代の変化に伴っても変わることのない崇高な理念であり、我々の魂であります。そして60周年を迎える本年は、広く市民の皆様へ青年会議所運動を認識・共有して頂く絶好の機会と捉えております。『過去・現在・未来』を紡ぎ合わせ、『市民・地域・国家』のつながりを明確にし、我々が取り組む今後の運動方針やその方向性を広く市民の皆様へ訴えることで、市民運動を喚起し、このまちの明るい未来の為に尽力して行かなければならない。またこれまで先輩方によって築き上げられた地域からの信頼や信用を決して汚すことの無いように、「彰往考来」の精神に立ち返りつつ時代の変化と共にめまぐるしく変わるニーズを的確に捉えながら力強く運動を展開して行こうではないか。

稽古とは 一より習い 十を知り 十より帰る もとのその一

物事は全て一から習い、十までを知るのであります。しかし、人から聞き、覚えるだけでは何の意味も持たない。習ってその教えを実践してこそ初めて自分のものとなるのである。その時にこそ押しつけではなく、自由自在の自分の意思をもって「私」のゴリ押しではなく「公」のために自らを最大限活かす事が出来るのである。

【地域社会との共生】

7 回目を迎える『夜・梅・祭』は、一泊型観光都市を目指し水戸が誇る財産を最大限に活用することで、地域コミュニティーがより強い絆で結びつき、市民主体のまちづくりを行う為の有効なツールである。回を増すごとに集客、協力団体が増え県内外の評価も上がり一定の成果が得られたと確信します。更なる事業発展の為に参加者自らがより積極的に関わる機会を作ることで、共に創るまちづくりの喜びと重要性を伝え、過去の検証をしっかりと行った上で計画的な移管を検討することも重要であると考えます。また市民生活において、まちの安全、安心は切り離すことができません。今回の東日本大震災を受け見えてきた対応の問題点を解決する為に、我々JC は初動のあり方や行政等との連携、防災・減災に対する意識の醸成等、具体的に実現可能なシステムをつくりあげよう。また今も尚続く復興作業においても地域社会と共生しまちの安全に寄与しうる中心的存在であり続けたい。その為にも、一年での完結は難しいが、人と人、人と地域、地域と地域等、バ

バラバラになっているものをつなぎ直す作業を通して地域社会を作り上げていく明確な第一歩を踏み出したい。いうならばソーシャル・キャピタルを醸成する作業なのだ。これは強いキーワードとして出てこなかったにせよ、我々の諸先輩方が行ってきた運動の延長にあり、青年会議所だからこそスピードを持って成し得る事が出来る訳である。バラバラな方向を向いた市民活動ではまちづくりは加速度的に成果を上げることは出来ない。コミュニティーが一体となり、自発的に行動する環境を整備し、コミュニティー全体の意識へと昇華させていく事が大切であり、様々な方々と議論し会話をしていく中で相互の信頼性を高めていくのである。それにより初めて真の地方自治・真の復興が確立されると確信している。

【市民が責任を持ち、市民主体の真の地方自治の確立】

平成23年に行われた水戸市長選挙の投票率は47・68%でありました。この投票率の低さは、自分たちの国やまちの政治・行政に対する無関心や、諸問題の解決が遅々として進まないことに対する不満や、あきらめと不信感に比例しています。しかしながら、もう誰が悪い、何がいけないと負の部分だけを取り上げて声高に叫び散らすのはやめにしよう。公に従事する我々青年会議所は、地域や地域住民の現状を鑑みつつも、何をする事がこの先の為になるのかを考え、実践して行かなければならないだろう。我々が考える地方自治には、自立した強い市民と広く意見を吸い上げる事の出来る行政システムが不可欠です。まず責任ある自立した強い市民である為には、地域の諸事や行政や政治に興味や関心を持つことから始めたい。自らの思想や哲学を持たなければならないという程難しい事を言っているわけではない。しかしながら、この地域の為を想い、渴望し実践をしていかなければ何一つ変わる事は無いのである。理念無き実践は暴挙であり、実践無き理念は空虚であるように、自らの信念・理念に基づき行動できる市民でありたい。その為にも、すべての市民に対して自由闊達に討論が出来る機会を提供しなければならないし、自らの尊い一票を投じ選択をした政治家のその後の動向を監視する事が出来るシステムや、数値化を図り誰にでも見やすく、そしてわかりやすく提示できるシステムの構築が急務である。そうする事により地域に関心を持ち、他人事にしない自らが創る自立した強い地域の創造に繋がるのである。

【地域のリーダーを育む力強い組織へ】

私たちが「市民主体の真の地方自治の確立」を進める上で、まずは自身が主体的に行動し、人の心に働きかけてその行動に影響を与えていく力を養うことが必要である。私たちの運動も含め、社会、企業、家庭などあらゆる場面において何か行動を起こそうとするとき、まず誰かが最初の一步を踏み出す必要がある。人は実現しようとするビジョンをもつことによって、それを達成しようとする意欲が生まれる。逆にいえば思い描いたことしか実現することはない。リーダーとして第一歩を踏み出すには、まず先見性をもってビジョンを示すことである。我々が掲げた「水戸未来ビジョン」は、発表してから7年が経ちました。精神性豊かな水戸のまちを実現することを目的として作成されましたが市民への認知度はどうでしょうか。ビジョンに謳った未来が実現できているのか、その取り組みについて検証を行うと共に、時代の変化を鑑みて見直すべきところは見直し、改定を行っ

てまいります。またその中で今後10年先の我々の進むべき方向性を指し示す運動指針を発表致します。それを実践する事で、まちづくりの新たな価値観を創造します。私たち一人ひとりの成長がまちを成長させることに繋がる。私たちは、地域のリーダーを育む組織である故に、時事問題への理解とメディアリテラシーを兼ね備え、自己研鑽を重ね、切磋琢磨するメンバーを有する強い組織であり続ける必要がある。そこで育まれたリーダーが多くの地域に生まれたとき、結果的に素晴らしい国の礎ができあがり、国家を導く力強いリーダーも現れるはずである。

【青少年育成】

私たちはこのまちに突然生まれ、一人で育ったわけではない。脈々と続く歴史や文化を継承したまちの人々に生まれ今の私たちがいる。その私たちが親となり、地域の大人となった今、現状を見ていると物質的豊かさが進む反面、人を敬い、まちを愛する気持ちが希薄になりつつあるのではないだろうか。コミュニティーの崩壊は無関心から始まる、人とまちに関心を持ち、ふるさとを誇りに思い確かな郷土愛を醸成する責任があります。その為には、自然に触れ、伝統や文化の継承と合わせて、子供たちとその取り巻く地域の人々とのこころの触れ合いを深めることも大切である。我々の運動を通して子供たちのこころに自分のまちとそこに暮らす人々への想いを深く刻むことで、「ふるさと」に住みたいと感じてもらえるような確かな郷土愛を醸成します。

【地域に必要とされる組織として】

2008年、新たな公益法人制度にかかわる法律が施行された。水戸青年会議所も今日まで取得に向けた制度改革への対応や、準備を重ねて来た。60年間、脈々と引き継がれてきた組織のあり方を充分理解した上で、公益社団法人格の取得を実現する。またただ単に、公益社団法人格を持つ団体ではなく、より地域に頼られ求められる団体として進化してまいります。そして、いくら質の高い事業を行っているとしても、そのことを多くの人が認知しなければ、それは自己満足に過ぎません。我々の運動は、積極的に市民に伝えることも重要である。その為には自らの広報物による効果的な発信や、魅力ある事業をマスメディアに多く取り上げられる機会を増やす事で、地域において、存在価値・認知度が高くなり、“ひと”は自然に集まりやすくなります。その結果会員拡大にもつながり、運動に賛同頂ける企業の協力についても好影響を与えることが想定される。これらのことが事業の質を向上させていくという連鎖を生み、ひとつの成功が他の成功を誘発する「正のスパイラル」となるのです。また本年は茨城ブロック会長始め多くの出向者を輩出いたします。それぞれが水戸の代表者として出向することで己を律し、自身の成長に繋がる絶好の機会となり、LOMの確かな礎となるはずです。出向者の動向には常に注意を払い、開催される事業にしっかりとコミットメントし例年以上に積極的な連携をしてまいりましょう。それがキャピタルとしての会長輩出でありLOMとして責任を果たす事に繋がりますし、この好機を生かす事にも繋がります。

【最後に】

古の時、聖徳太子は「和」こそが人々の秩序を守り、平和をもたらすと信じ「和の精神」を前面に出し、日本最古の成文法となる「十七条の憲法」を制定した。象徴的な第一条では、『和をもって貴しとなし 忤らうこと無きを宗とせよ』と書かれている。そのせいも、彼の在職中は一件の内乱も起こらなかったそうである。内乱が起こりそうになれば自らが東に走り、西に飛び、真心を込めて話し合い、手を差し伸べ未然に防いだそうだ。リーダーのところが正しく豊かで、誠があれば、決して乱は生じない良い一例であろう。私自身、全ての皆様と真摯に真正面から向き合う覚悟である。メールや携帯といった便利なものだけに頼ることなく、使い分けをしながら皆様と直接の対話の中から物事の本質を見出し、信頼を積み重ねて行きたい。議論の中で時の感情に流され怒りや猜疑心にとられる事無く綿密なる事前の準備を怠らぬよう心がけます。怒りの静まりと共にやってくるのは往々にして後悔や自己嫌悪である、限りある時間を大切に使う為にも物事に費やす時間の質を高めることにより明日へつながる第一歩を踏み出していきたい。